

そこで、兄弟たち。堅く立って、私たちのことば、手紙によって、教えられた言い伝えを守りなさい。 Ⅱテモテ2:15

2015(27)年 週 報

3月15日
第3聖日
第3395号

「キリストの体なる教会」

聖
言

「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方のみちておられるところです。」(エペソ1:23)

礼拝の恵み 第二〇章
第八部 礼拝の障害
第一節 我意

信者は神に近づけば近づくほど、自分自身の無価値と罪とをますます意識させられる。それゆえ、われわれの聖なる供え物の罪を負う御方を神のみまえにおいてもつていっていることは、どんなに幸いなことであろう。神の礼拝のなかへ割り込んでくる我意の典型的な例は、おそらく、大祭司アロンの子らナダブとアビフとの場合であろう(レビ一〇ノ一〜一)。この二人は多分、酒を飲んでいたのであろう(九節)——この飲酒がこの二人に自制心の欠けていた一証左である、おのおのその香炉を取って、火をこれにいれて、自分の作った薫香をその上に盛り、主のあきらかな命に真正面から反対して、それを金の祭壇の上でみまえにささげた。この我意の行為に対する神の反応はさばきであった。聖書に「主の前から火が出て、彼らを焼き尽くし、かれらは主の前で死んだ」(二一節)とあるからである。アロンは何か抗議したであろうか。彼に対する神の言葉は彼を黙らせてしまった。「わたしに近づく者によって、わたしは自分の聖を現わし、すべての民の前でわたしは自分の栄光を現わす。」(三節)とあるからである。

(ギブス「礼拝」より)

イエス・キリスト聖成伝道教会・東洋聖書神学院・聖成基督教団

牧師 山本 稔 〒653-0812 兵庫県神戸市長田区長田町1丁目2番6号

電話：FAX (078) 691-1419 郵便口座番号 01170-3-20374

<http://jchec.org/>

minoru_yamamoto@hotmail.co.jp メール m7-inoru@ezweb.ne.jp

二〇一五年三月八日午前一〇時 礼拝 山本牧師

「キリストを死者の中よりよみがえらせる」

神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。(エペソ一ノ二〇、二二) (エペソ人への手紙は獄中書簡である。後はピリピとコロサイである。エペソは当時有名なテュアナ女神の神殿があり、世界の港湾都市として栄えた。知識、物質、宗教の豊かさを誇っていた。ちょうど神戸の町のようにであった。そのような中で信仰をしている信者に対して信仰を守られるように送った書簡である。教会は地の塩であるとともに世の光である。ゆえに、きよさとともに世の模範とならねばならない。

それとともに教会には力が与えられなければならない。それは死から打ち勝つ力

すなわち黄泉にくだられたキリストを死者のなかよりよみがえらされた力である。これは死に恐れるわれらの希望である。

である。十字架と復活の力である。神はこの全能のちからすなわちダイナマイトのちからをキリストに働かせてくださる。すなわちエネルギー与え、

次に神の右につかせ、すべての支配、権威、権力、主権を与える。

人間の終局、支配欲である。世界の長者番付の一番はビリゲイツである。わずかな裕福者と大半の貧しい者のいるアンバランスな世界。しかし、教会はクリスチャンは目に見え、消え行く豊かさでなく、愛、きよさ、勇氣、知性、人格的豊かさ、具体的に語学、経済、記憶、体力、意

思疎通、決断、行動、整理、交渉、忍耐、快眠、表現、傾聴、実行、企画、持続、包容、創造それらをもって世界をリードするのである。それはキリストが教会におられるとき可能となる。

二〇一五年三月四日午後七時 祈祷会 山本牧師

「モアブに対する宣告」(エゼキエル連講四二回)

「さて、モーセはカデシユからエドムの王のもとに使者たちを送った。「あなたの兄弟、イスラエルはこう申します。あなたはわたしたちに降りかかった困難をご存知です。私たちの先祖たちはエジプト時に下り、私たちはエジプトに長年住んでいました。しかしエジプトは私たちや先祖たちを、虐待しました。」

そこで、私たちが主に叫ぶと、主は私たちの声を聞いて、ひとりの御使いを遣わし、私たちをエジプトから連れ出されました。今、私たちはあなたの領土の境にある町、カデシユにおります。

どうか、あなたの国を通らせてください。私たちは、畑もぶどう畑も通りません。井戸の水も飲みません。私たちは王の道を行き、あなたの領土を通過するまでは右にも左にも曲がりません。」しかし、エドムはモーセに言った。「私のところを通過してはならない。さもないと、私は剣をもっておまえを迎え撃とう。イスラエル人は彼に言った。「私たちは公道をのぼって行きます。私たちと私たちの家畜があなたの水を飲むことがあれば、その代価を払います。ただ、歩いて通り過ぎるだけです。」(民二〇ノ一四〜二二)

エルサレムが破壊された時には、エドムはバビロンの傭兵となり、攻撃に積極的に協力した。「その日には、主の御告げ。わたしはエドムから知恵あるものたちを、エサウの山から英知を消し去らないであろうか。テマンよ。あなたの勇士たちはおびえる。虐殺によって、エサウの山から、一人残らず絶やされよう。あなたの兄弟、ヤコブへの虐殺のために、恥があなたをおおい、あなたは永遠に絶やされる。他国人がエルサレムの財宝を奪い

さり、外国人がその門に「押し入り、エルサレムをくじ引きにして取った日、あなたもまた彼らのうちのひとりのように、知らぬ顔で立っていた。あまたの兄弟の日、その災難の日を、あなたはただ、ながめているな。ユダの子らの滅びの日に、彼らのことで喜ぶな。その苦難の日に大口を開くな。彼らの災いの日に、あなたは、わたしの民の門にはいるな。そのわざわいの日に、あなたは、困難をながめているな。そのわざわいの日に、彼らの財宝に手を伸ばすな。そののがれる者を断つために分かれ道に立ちふさがるな。その苦難の日に、彼らの生き残ったものを引き渡すな」オバデヤ8〜14）イスラエルの弱みにつけこんでの復讐であった。そこで主はエドムに復讐し、人も獣も断ち滅びし、そこを廃墟にするといわれる。このことはマカベヤ時代に実現され、エドムはイスラエルの属領になった。

ペリシテ人については「ペリシテ人は復讐を企て、心の底からあざけて、ひどい復讐をし、いつまでも敵意をもって滅ぼそうとした。」（一五節）主は「見よ。わたしは、ペリシテに手を伸ばし、ケレテ人を断ち滅ぼし、海辺の残った者を消えうせさせる。」（一六節）と言われる。「ケレテ人」とは、ペリシテ人の一族で、クレテ島から移住してきたので、そう呼ばれた。ペリシテ人は自分たちの敵であるイスラエルが落ち目になったのを喜び、それに乘じて復讐し、恨みを晴らそうとした。主は人の弱みに付け込んで復讐するものを嫌われる。「あなたの敵が倒れるとき、喜んでほならない。彼がつまづくとき、あなたは心から楽しんでほならない。」（箴言二四ノ一七）。人が打たれるとき、自分が打たれなかつた幸を思って、罪を悔い改めるべきである。エルサレムでさえあのように滅ぼされたのなら「自分たちは」とは反省する必要はどの民族にでもあつたはずである。「神の慈悲があなたを悔い改めに導くことを知らないで、その豊かな慈悲と忍耐と寛容とを軽んじてはならない」（ローマ二ノ四）イエス様は「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈り

なさい。」（マタイ五ノ四四）。パウロも「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであつて、のろつてはいけません」（ローマ一二ノ一四）。イエス様は十字架の上から「父よ。彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ二三ノ三四）と、自分を十字架につけた人々のために祈られた。ステパノも石で殺すもののために「主よ。この罪を彼らに負わせないでください」（使途七ノ六〇）。わたしたちも主のお心を知って、さばきを神にゆだね「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しく裁かれる方にお任せになられました。」（一ペテロ二ノ三二）。「だれに対しても、悪に悪を報いることをせず、すべてのひとが良いと思うことを図りなさい。」（ローマ一三ノ一七）。イエス様はだれでも可能性のあることを信じた。今の時代は使い捨てです。競争に脱落したならおしまい。失敗したらやり直しのきかない時代。みんな必死です。しかし、イエス様は赦しを祈られた。三度も主を知らないと言つたペテロを見捨てなかつた。た。イエスは人間の原罪を問題としてゐる。エソウとヤコブは兄弟である。その子孫がエドムとイスラエルである。兄弟は悩みの時に作られたのに弟の苦しみに対して、傷口に塩を刷る込む。ここに原罪、人の不幸を喜ぶ。ゆえに人の成功を悲しむ。どうしようもないのか。イエス様はそのために十字架にかかられ、苦しみの極限に罪人の赦しを神に祈られる。